

東大寺 転害門の調査

調査の経緯 この調査は、文化庁が東大寺転害門 1/10 模型製作のために設置した調査用足場を利用し、当研究所と財団法人文化財建造物保存技術協会が共同でおこなったものである。

転害門は奈良時代に建立された東大寺の西面北門である。建久六年（1185）に大改造がなされ、現在の姿はこの改造後の姿である。昭和7年に、解体修理がなされるが、この時の詳しい知見を示した資料が刊行されておらず、転害門について記されたものの殆どが、概説的な説明にとどまっているのが現状である。そこで、今回の調査では、詳細な部材調査をおこない、基礎的なデータの作成と、転害門の歴史的考察をおこなった。98年度には調査報告書の刊行を予定しており、ここではその概要のみを述べる。

基壇 現在の基壇は鎌倉時代につくられた花崗岩製の壇上積基壇で、鎌倉時代以後も幾度かの修理を経ている。文化庁所蔵の昭和7年の修理前の平面図には、現基壇下から発見された凝灰岩の石列が書き込まれており、当初は凝灰岩を使用した基壇と推定される。

柱 柱は円柱で、頂部に棕をもつ。柱の長さは全てが同一でなく、隅の柱を一番長くするいわゆる隅延びをもつ。また、側柱が内側に少し傾くように立てられていた痕跡があり、当初は内転びをもっていた。しかし、後の修理時に真っ直ぐに立つように矯正されている。

柱間装置 現在は棟筋中央間を扉口、同脇間を壁とする他はすべて開放としている。しかし、現在開放となっている柱間でも、柱や虹梁に残る痕跡から、ある時期には現在と異なる高さに貫が入れられたり、壁が設けられたり、床もしくは天井が張られたり、本来の門の機能としては必ずしも必要でない施設が付加されている。この門が、手向山神社（東大寺八幡宮）の祭礼である転害会の際の御輿の御旅所として使用されていたことから、祭礼にかかわる機能にしたがった改造と考えられる。

現在の扉構は鎌倉時代以降の形式と考えられる。礎石の形状から創建当初も唐居敷が使用され、柱面に残る風蝕差から柱に辺付が密着していた形式に復原できる。

組物 奈良時代には平三斗でつくられ、鎌倉時代に出組

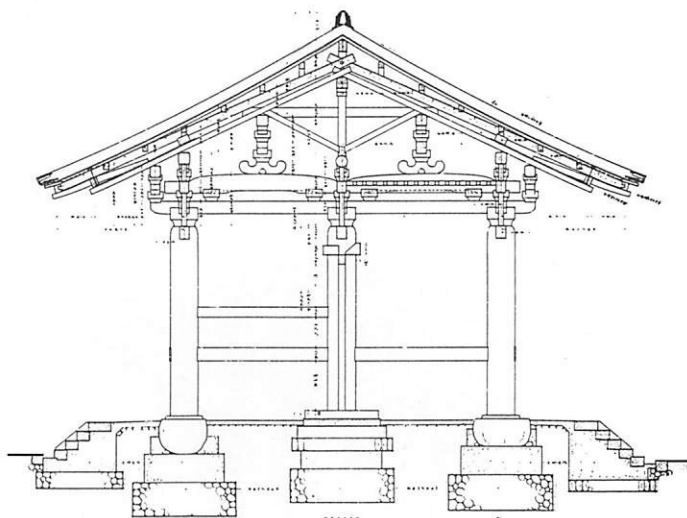


図1 転害門断面図 1:200 (文化庁所蔵)

図2 転害門全景

に改造されたことは従来から知られている。これは、肘木や斗のかたち、改造時に補入された通し肘木の本鼻のかたちからもあきらかである。

奈良時代の肘木は下端の曲線が緩い曲線で、上面に笹線をもつ。鎌倉時代の肘木は下端の曲線が円弧に近い曲線で、その差は明確である。肘木は主として、母屋桁筋と東側柱筋上に当初材を使用し、その他では鎌倉時代の部材を使用する。手先の秤肘木にくわえて、西面の壁付の肘木も鎌倉時代に新調されている。壁付の肘木は当初の平三斗のものをを使用することも可能のようだが、平三斗では虹梁との組み合わせ上肘木が上木としてつくられるが、出組の場合は手先の肘木との組み合わせで肘木は下木でつくられるので、当初の肘木をそのまま使用することはできない。そこで、鎌倉改造時には、組み合わせの欠き込みのない母屋桁上と妻の棟で使用されていた4つの肘木を東側の壁付の肘木と入れ替え、西側の肘木をすべて新調している。

斗は全体のバランスや斗線の曲線の違いから当初材と鎌倉材との違いは明確である。鎌倉時代の斗には皿斗をもつ大仏様のものもあり、鎌倉時代に和様と大仏様の2種類の斗が併用され、大仏様の斗は秤肘木上で使用されている。また、これらとは明らかに異なって斗面の成が著しく高く平安時代と思われるの斗も見受けられる。

桁・棟木 現存する当初の桁材は棟筋の化粧桁のみで、他の材は鎌倉時代以降もしくは昭和の材である。鎌倉時代の桁材には二種類あり、ひとつは隅を丸く面取りした長方形断面で、実肘木や斗に乗る部分では下端の面をとらずに直面にしている。もうひとつはいわゆる大仏様のもので、出桁の一部に使用されており、強い胴張りをもつ断面形である。棟木はケラバのみに円形断面の材を使用するが、いずれも昭和材である。鎌倉時代の懸魚には丸面取り長方形断面の棟木が取り付けいた痕跡があり、昭和修理時に円形断面に変更されたものである。

小屋・軒まわり 内部の小屋構造は、棟筋化粧桁上の束と実肘木で棟木を受け、化粧垂木上に野小屋をかける。

軒は二軒で地垂木の出は8尺、飛檐垂木の出は2.5尺である。垂木割は各柱上で手挟んで、中央間20支（20尺）、端間18支（18尺）、すなわち1支1尺としている。桁・母屋・棟木のうちで、残存する当初材は棟筋の化粧桁のみであるが、化粧桁上が後補材で覆われているために、当初の垂木割を確認するにはいたらなかった。鎌倉時代の桁を見る限りでは、現在の垂木割は鎌倉時代以降改変は見られない。また、現在のケラバの出も鎌倉時代までは遡ることが確認できる。

飛檐垂木は、当初のものがなく、すべて鎌倉時代以降の材で、当初の形式は不明である。

地垂木は少なくとも4種類ある。ひとつは当初材で、直径15cm前後の円形断面で、側桁より内側では方形のまま残し、拌み部分の三枚枘を残すものがある。垂木に残る釘穴から、鎌倉時代の改造時に、地垂木が2尺外へ引き出されたことが判明する。

鎌倉時代の垂木は丸く面をとった長方形である。鎌倉改造時から昭和修理の間にも垂木の取り替えがおこなわれ、ある時期には小判型の断面の垂木が使用されている。昭和修理の時には、規則的に3本に1本の割合で新材に取り替え、垂木尻を棟木上で合掌に組んで、構造的安定をはかっている。

また、鎌倉時代の改造時に地垂木尻が化粧棟からはず

され、母屋桁と棟木間をつなぐ部材がなくなったために、東西の母屋桁間を繫材で繋いでいる。

屋根の反りをつくる茅負・木負・野棟木はすべて昭和修理時に取り替えられている。奈良県所蔵の昭和修理前の断面図によれば、修理前の野小屋内部は現状よりも若干広く、現状の姿は昭和修理でつくられたものであろう。**当初形式** 創建当初の姿は、柱間装置は現在と同じく棟筋中央間扉、同脇間土壁、その他は開放であった。柱高は17尺で、腰貫は使用せず、頭貫の成は現状より若干低い。柱は隅延び、内転びをもつ。組物は実肘木付平三斗、架構は妻では二重虹梁蓼股形式で、内部では束立ち構造とする。いわゆる三棟造で、桁・棟木は円形断面である。地垂木の出は6尺と推定され、飛檐垂木の有無やその形式は不明である。建物内部の地垂木では、板を貼ったり、壁を塗り上げるなどして垂木上（垂木間）を塞いだ痕跡に乏しく、当初から何らかのかたちで、野地が垂木から離れてつくられていた可能性がある。

鎌倉期の改造 鎌倉時代の改造時には、腰貫を入れ、頭貫の成を高くする。組物を出組へ改造（大仏様と和様を併用）し、大仏様木鼻をもつ通し肘木を入れる。桁材のうち側桁・母屋桁は丸面取り長方形断面の材に新調し、出桁の一部には大仏様の部材を使用している。地垂木を前に引き出して出を8尺にし、下端のみをやや反りあげた飛檐垂木をつくり、その出を2.5尺とする。

このように、鎌倉期の改造では和様の部材と大仏様の部材が混在して使用されている。これは、表側にあたる西面は当時最新の様式である大仏様を基調としたデザインで、背面側にあたる東面は当初材を使用しながら和様を基調としたデザインで改造されたためであろう。鎌倉期の東大寺の復興において、転害門の修理は、大仏殿の落慶に間に合わせるように緊急性をもっておこなわれ、南大門や西大門に先立って工事がおこなわれている。また、建物の格式を上げるために出組に改造されていることから、京都からの街道に対する正面の門として機能した可能性が考えられる。（島田敏男／藤原調査部）